

草の芽句会だより

NO,173

23, 1月

孫受験言葉少なく盆点前
雨止んで処々水仙の花明かり

範子

絵馬吊す合格祈願初詣
大吉の運を喜ぶ初詣

貞子

年惜しむこの一年に残す思ひ
歳時記を広げしままに年暮れぬ

節子

南天の窓にかかりし初湯かな
松過ぎを臥せりし床の薄埃り

文子

病む友と思ひ出尽きぬ初電話
喪に服す友に一筆寒見舞

禮子

蠟梅や漂う香气こぼれ散る
こもり居の狭庭に一輪冬薔薇

純子

五百羅漢に薄日の射せる大冬木
夕映えに輝き増して黄水仙

剋子

投句者 吉崎 川原 氏家 大黒 馬場 森
小山

暖かいお正月が過ぎて早くも大寒である。今年は十年に一度の寒波だとか、天気図を見ると四国はすつぽり西からの低気圧に覆われている。草の芽の仲間にとって寒さほど苦手なものはない。それでも炬燵からガラス越しに庭を眺めると、蠟梅が咲き誇り「次なる季節は春だよ」と告げている。登下校の自転車を通る垣根には深紅の寒椿が凜と咲いて子供たちを見守っている。通りかかったお遍路が氏神様へお詣りをする姿も見られる。お正月気分も抜けて日常生活が戻ってきた。

新年の句会は全員の投句で始まった。年末年始の忙しかった中、清新な句が寄せられている。今年も元気で頑張りましょう。どうぞよろしくお願いいたします。

